

当教室における子宮筋腫の統計

昭和36年4月10日 受付

信州大学医学部産婦人科学教室

(主任: 岩井正二教授)

小野 義夫 佐藤 治子

Statistical Observation on Myoma Uteri in Our Clinic

Yosio Ono and Haruko Sato

Department of Obstetric and Gynecology, Faculty of Medicine,

Shinshu University

(Director: Prof. S. Iwai)

当教室における昭和26年度から34年度までの、最近9年間の子宮筋腫入院患者153例について統計的観察を行ったので報告する。

成績

1. 頻度

昭和26年から34年までの婦人科入院患者1,694名中、子宮筋腫患者は153名で9.0%にあたる。年度別にみると表1のごとく32年度の6.3%が最も少く、34年度の15.5%が最も多い。諸家の報告では、全婦人科患者に対する頻度に関し、今村3.1%、沼部3.4%、岡本4.4%と報じ、長崎大学の入院患者を対照とした統計では6.03%の報告がある。また35才以上の婦人のうちWinckelによれば約12%、Bayleによれば20%に筋腫をみると云う。

表1. 頻度

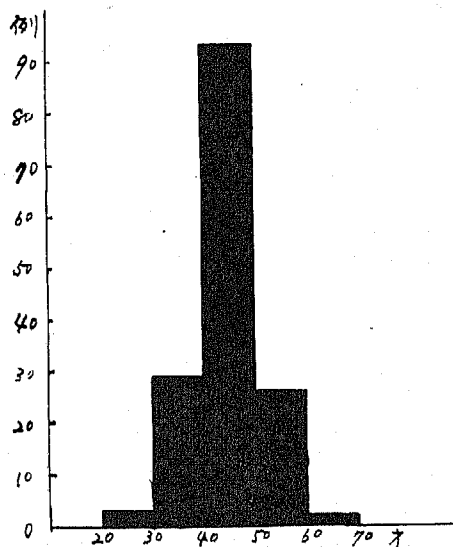
| 年 度 | 婦人科入院患者数 | 筋腫入院患者数 | 百分率 |
|-------|----------|---------|------|
| 昭和 26 | 212 | 17 | 8.0% |
| 27 | 302 | 20 | 9.9 |
| 28 | 194 | 13 | 6.7 |
| 29 | 201 | 15 | 7.4 |
| 30 | 198 | 15 | 7.5 |
| 31 | 171 | 22 | 12.2 |
| 32 | 157 | 10 | 6.3 |
| 33 | 184 | 14 | 7.6 |
| 34 | 175 | 27 | 15.5 |
| 計 | 1994 | 153 | 9.0 |

2. 手術時年齢

手術時年齢は図1のごとく、最少年令26才、最高年令66才、平均43.9才で、いづれの年度においても40~49才が最も多い。60才以上は1.3%、19才以下はなく、

40~49才をピークとして大体対称的な山をなしている。今村・田栗らの報告もほとんど同様で、19才以下0、20~29才1%、30~39才23%、40~49才79%、50~59才19%、60才以上1%としている。若年では河田は13才11ヶ月の少女における指示頭大の粘膜炎下筋腫を報告し、その他22才、23才の若年に発生したとの報告があるが、自覚症状発生から手術を施行するまでの期間が、特に結婚前の少女では長くなりがちなので、発見年令が遅れることも若年者に少い因と考えられる。

図1. 年 令



3. 発生部位

体部と頸部をさらに陸上部と陸部としてわけた場合、表2のごとく、体部が絶対的に多く95.5%を占め、陸上部3.3%、陸部1.3%の順である。すなわち頸部は4.6%となるが、他の報告では、Bigelow 0.35%、

表 2. 発 生 部 位

| 発生部位 發育方向 | 発生部位 | | | 計 | 百分率 |
|--------------|------|------------|------------|-------|-------|
| | 体 部 | 頸 部 膈上部 | 頸 部 膈下部 | | |
| 粘 膜 下 | 11 | 2 | 0 | 13 | 8.5 |
| 間 質 | 71 | 3 | 0 | 74 | 50.6 |
| 漿 膜 下 | 28 | 0 | 0 | 28 | 18.2 |
| 合 併 | 36 | 0 | 2 | 37 | 22.8 |
| 計 | 146 | 5 | 2 | 153 | 100.0 |
| 百 分 率 | 95.5 | 3.3 | 1.3 | 100.0 | |

山崎4.2%，今村12.6%等がある。上記3型中，最も少ない膈部筋腫の発生頻度は0.1~0.6%とされているが，わが教室では膈部筋腫が1.3%でやや多くみられる。腫瘍の發育方向による分類では筋層内が最多で50.6%，次いで混合型，漿膜下，粘膜下の順である。今村・田栗らによれば，筋層内42.1%，粘膜下8.4%，漿膜下17.6%，混合型31.9%としているが，これとほとんど同値である。

4. 大 き さ

子宮全体の大きさ，すなわち，子宮の巾，厚さ，長さのうち最大のものについて10cm以下から20cm以上まで4段階にわけた。表3のごとく，11~15cmのものが最も多く40.0%で，最大のものは20×17×23cm 2800gであった。わが国における巨大筋腫の報告には小川の32.21kg，加藤・片山の36×29×35cm 8.2kgなどがある。

表 3. 大 き さ

| 最 大 径 | 計 | 百 分 率 |
|-----------|-----|--------|
| 10cm 以下 | 44 | 28.6 % |
| 10 ~ 15cm | 76 | 40.0 |
| 16 ~ 20cm | 23 | 15.0 |
| 20cm 以上 | 10 | 6.5 |
| 計 | 153 | 100.0 |

5. 主 訴 及 び 月 経

表4のごとく主訴のうち最も多いのは，不正子宮出血の52例34.4%であるが，不正子宮出血に関する諸家の報告では岡村88.5%，今村37.8%，吉永19.8%等があり，統計成績はまちまちである。そのほか過多月経は29.4%，月経不順は28.7%ある。また性器脱垂感及び無月経は夫々子宮脱，妊娠例にみられたものである。

腫瘤感，腹痛及び腰痛等のいわゆる圧迫症状は39.9

%で，その他排尿障害や，腸，血管圧迫症状を主訴としたものは全くなかった。

表 4. 主 訴

| 主 訴 | 例 数 | 百 分 率 |
|---------|-----|--------|
| 不正子宮出血 | 52 | 34.0 % |
| 月 経 痛 | 27 | 17.6 |
| 過 多 月 経 | 45 | 29.4 |
| 腫 瘤 感 | 44 | 28.7 |
| 月 経 不 順 | 55 | 35.9 |
| 腰 痛 | 6 | 4.0 |
| 腹 痛 | 10 | 6.5 |
| 性器脱垂感 | 1 | 0.7 |
| 無 月 経 | 3 | 2.0 |

月経との関係については表5のごとく，先づ量との関係では，多量29.3%，中等量64.3%，少量6.5%で，順，不順との関係は表6のごとく順64.3%，不順35.8%，また持続日数は表7のごとく最小2日最大，20日平均6.4日である。なほ初潮年齢は，図2のとおりで

表 5. 月 経 量 と の 関 係

| 量 | 例 数 | 百 分 率 |
|---|-----|--------|
| 多 | 45 | 29.3 % |
| 中 | 99 | 64.3 |
| 少 | 10 | 6.5 |
| 計 | 153 | 100.0 |

表 6. 月 経 と 不 順 と の 関 係

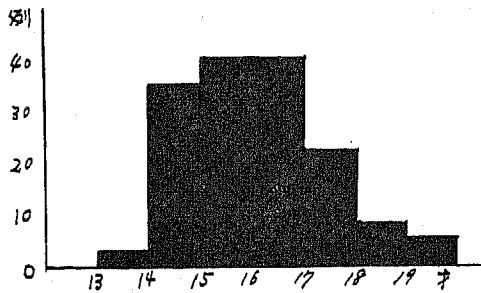
| 周 期 | 例 数 | 百 分 率 |
|-----|-----|--------|
| 順 | 98 | 64.3 % |
| 不 順 | 55 | 35.8 |
| 計 | 153 | 100.0 |

表 7. 持 続 日 数 と の 関 係

| 持 続 日 数 | 例 数 | 百 分 率 |
|-----------|-----|---------|
| 1 ~ 3 日 | 35 | 22.75 % |
| 4 ~ 6 日 | 59 | 38.85 |
| 7 ~ 9 日 | 32 | 20.85 |
| 10 ~ 15 日 | 19 | 12.35 |
| 15日 以上 | 8 | 5.20 |
| 計 | 153 | 100.00 |

平均15.8才を示し最小は13才，最高は19才であつた。本症患者は初潮が早く，更年期が遅く，月経周期は短く，持続日数が長いとされているが，量，持続日数においては約30%がそのような状態に当てはまるが，平均初潮年齢は正常人の平均と変わらず，意義のある値は得られなかつた。

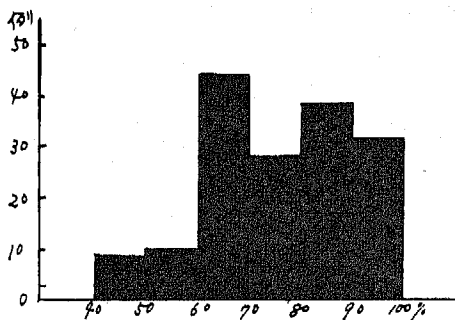
図 2. 初 潮 年 令



6. 血液所見

血液所見は図3のごとく，Hb ザーリーは最低31%，最高96%で60~69%が最も多く，平均70.4%で，沼部の72%，岡本の67.5%，今村の78.7%とほぼ同様である。Hb 60%以下の者は不正子宮出血，過多月経の両方を訴えているものが多いが，全体的にみて軽度の貧血を呈する。

図 3. 血 色 素 量



赤血球数は図4のごとく最少200万，最高510万で，300万代が最も多く，平均355万で，沼部の360万，岡本342.5万，今村359万とほとんど同じである。

白血球は図5のごとく5000代が最も多く，最少3000，最多14700（卵管溜膿腫合併例）で，平均6258である。諸家の報告では，沼部6800，岡本5977，今村7116と報じている。

7. 婦人科の合併症

婦人科合併症のないものは表8のごとく69.0%で，

図 4. 赤 血 球 数

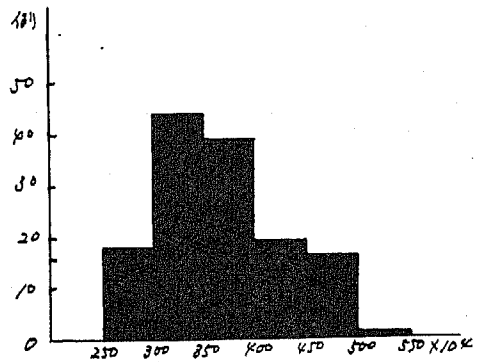


図 5. 白 血 球 数

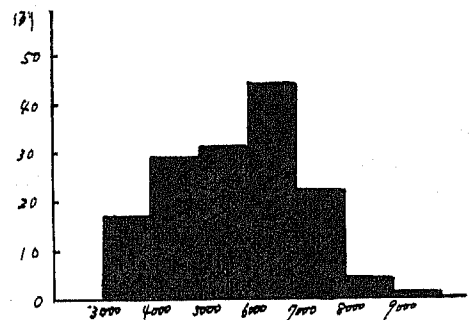


表 8. 合 併 症

| 合併症 | 例 数 | 百分率 |
|---------|-----|-------|
| 卵管溜水腫 | 7 | 4.6% |
| 卵巣嚢腫 | 9 | 6.0 |
| 卵管溜膿腫 | 2 | 1.3 |
| 慢性付属器炎 | 1 | 0.7 |
| 卵管卵巣嚢腫 | 3 | 2.0 |
| 妊 娠 | 6 | 3.9 |
| 子 宮 脱 | 3 | 2.0 |
| 卵 巢 癌 | 1 | 0.7 |
| 子 宮 体 癌 | 2 | 1.3 |
| 合併症なし | 123 | 69.0 |
| 計 | 153 | 100.0 |

合併症が付属器に關係するもの15.3%，そのうち卵巣のものが8.7%，妊娠との合併3.6%，子宮脱2.0%，悪性腫瘍との合併は，両側の卵巣癌0.7%，子宮体癌1.3%である。付属器合併症の卵管溜水腫，卵管卵巣嚢腫の形で合併しており，卵管膿瘍は1.3%，慢性卵管炎は0.7%で少い。

8. 不妊及び経産回数

表9のごとく原発性不妊は、体部筋腫30%，頸部筋腫40%，一児不妊例は体部筋腫14%，頸部筋腫40%である。三谷が体部筋腫33.7%，頸部筋腫30.8%，今村・田栗らは体部筋腫35.3%，頸部筋腫33.3%，膈部筋腫0%と報告しているが、これらとは同じ値である。

表9. 不妊

| 発生部位 | 総数 | 不妊を訴える者 | | | |
|------|-----|---------|------|------|------|
| | | 原発性 | 百分率 | 1児不妊 | 百分率 |
| 体部 | 146 | 44 | 30.0 | 21 | 14.0 |
| 膈上部 | 5 | 2 | 40.0 | 2 | 40.0 |
| 膈部 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 153 | 46 | 29.9 | 23 | 15.0 |

経産回数は表10のごとくで、最高は15回というのが1例あり、平均2.1回で2回経産が最も多いが、平均回数は今村の3.78，沼部の3.1，岡本の3.73より少し低い。平均分娩回数は一般婦人に比し少ないが、頻産婦にも本症の発生する事は珍しくない。

表10. 経産回数

| 経産回数 | 例数 | 百分率 |
|-------|-----|-------|
| 0 | 46 | 30.4% |
| 1 | 23 | 15.0 |
| 2 | 28 | 18.2 |
| 3 | 19 | 12.4 |
| 4 | 16 | 10.4 |
| 5 | 7 | 4.1 |
| 6 | 8 | 5.3 |
| 7 | 1 | 0.7 |
| 8 | 1 | 0.7 |
| 9 | 1 | 0.7 |
| 10回以上 | 1 | 0.7 |
| 不明 | 2 | 1.3 |
| 計 | 153 | 100.0 |

9. 手術々式

表11のごとくであるが、根治術式を97.0%に行いそのうち腹式が89.2%，膈式7.8%，粘膜炎筋腫に捻除術を行ったのが3例ある。妊娠を合併していた6例中1例は掻抓術だけで筋腫手術は行わず、妊娠10ヶ月でポロー氏手術を行った1例がある。全手術において一次死亡例はみられなかった。

表11. 手術々式

| 手術々式 | 例数 | 百分率 |
|-----------|-----|-------|
| 膈上部切斷術 | 15 | 9.8% |
| 単純剔出術 腹式 | 121 | 78.7 |
| " 膈式 | 12 | 7.8 |
| 捻除術 | 3 | 2.0 |
| 手術せず掻抓術のみ | 1 | 0.7 |
| ポロー氏手術 | 1 | 0.7 |
| 計 | 153 | 100.0 |

結 論

1) 当教室婦人科全入院患者に対する筋腫患者の頻度は9.0%であつた。

2) 手術時平均年齢43.9才，最少26才，最高66才で40~49才に最も多く39.0%である。

3) 発生部位は体部95.5%，頸部4.6%，発育方向による分類では筋層内50.6%，漿膜下18.2%，粘膜炎下8.5%，混在型22.8%である。

4) 大きさは最大20×17×23cm，2800gで11~15cmの間が一番多い。

5) 主訴は月経不順35.9%，子正子宮出血34.4%，月経過多29.4%等が多く，次いで子宮の圧迫症状である腫瘍感，腹痛，腰痛が多い。

6) 血液所見はHbは31~96%の範囲で，平均70.4%，赤血球は200~510万の範囲で平均は355万，白血球は3000~14700の範囲で平均は6258で全体的に軽度の貧血を呈する。

7) 婦人科合併症を有するもの31.0%，そのうち付属器に関係するもの15.3%，卵巣のもの8.7%，悪性腫瘍2.0%である。

8) 原発性不妊は体部筋腫30%，頸部筋腫40%で経産回数は平均2.1回，最高15回である。

9) 手術々式は，根治手術97.0%，そのうち腹式89.2%，膈式7.8%であり，捻除術2.0%で妊娠合併の6例中1例はポロー氏手術，1例は掻抓術のみであつた。全手術において一次死亡例はみられなかった。

岩井教授の御指導，御校閲を感謝する。

文 献

- ①今村臣正・田栗雪雄：産婦の世界 6；8，776，昭28
 ②岩田正道：日本産婦人科全書 1；2-1 ③加藤正三・岸山 穂：産婦実際 3；3，72，昭29 ④河田英夫：産婦実際 1；12，53，昭27 ⑤三谷 靖：産婦実際 1；10，12，昭27 ⑥沼部元大・菅野恒久：産婦実際 3；12，753，昭29 ⑦岡本 詢：産婦実際 4；6，377，昭30